

Title	『ロンドン論集』から『根をもつこと』へ：1930年代の問題との関わりを中心に
Author(s)	田中, 由里子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/22994
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【17】

氏名	田中由里子
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 25054 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学位論文名	『ロンドン論集』から『根をもつこと』へ — 1930 年代の問題との関わりを中心に —
論文審査委員	(主査) 准教授 高階 早苗 (副査) 教授 山元 孝郎 准教授 藤平シルヴィ 教授 堀江 新二 コミュニケーションデザインセンター教授 小林 恭

論文内容の要旨

『根をもつこと』と題される論文及び『ロンドン論集』等が書かれたのは、ヴェイユがロンドンに到着し、フランス臨時政府「自由フランス」において書く場を与えられた 1942 年末から 1943 年 4 月病を得て入院するまでの半年程の短期間である。その場は偶然に与えられたものであるが、ヴェイユはその機会を、現実を検証し、その現実といかに関わっていくかを考え、行動する場としたのである。「自由フランス」がヴェイユに与えた仕事は、当時の様々な状況分析やその報告だけでなく、近い将来の「新政府」の為の憲法や政府の

あり方についての検討等もあり、その内容は多岐にわたる。『ロンドン論集』中の多くはその報告論文である。とりわけ 1940 年 6 月の状態に至った原因 - 特に第三共和制の - を究明することは、当時のフランスにとって、一つの課題であった。ヴェイユは 1930 年代にその激動の生（地方の哲学教師として勤務する傍らアナルコ・サンディカリストとして労働運動に参加、女工として工場労働やスペイン市民戦争での体験等）を送ったのであり、経験した矛盾は 1930 年代の現実が抱えるものであった。『ロンドン論集』には、ヴェイユのその当時の様々な問題意識が表明されているのである。

これら『ロンドン論集』論文が『根をもつこと』執筆へと結びついていく。言い換えれば、『ロンドン論集』で考察された内容が、ある明確な目的をもって推敲され秩序づけられ纏められたものが『根をもつこと』なのである。目的とは、ある病の診断と治療法を提示することである。病とは 1940 年 6 月以降のフランスの人々の一種の虚脱状態を指す。ヴェイユはそれを根こぎの病と捉えた。『根をもつこと』において、ヴェイユは、根こぎの病の根源を、自身が生きた 1930 年代のみならずフランス及びヨーロッパの過去の歴史にも求める。そしてその治療法を提示するのである。その治療法の根幹に関わる考察がすでに『ロンドン論集』に見られる。『ロンドン論集』から『根をもつこと』へは、一つの土台となる思考が - それは 1937~8 年キリスト教接近以降に深められた彼女の宗教的人間論に基づくものであるが - 、一貫して流れているのである。

それは、この世の現実（必然）とこの世の外側の実在との絆を結ぶ必要性の主張である。『根をもつこと』は、その絆を結びなおすこと、つまりこの世のあらゆる場で靈性を回復することによる「治療」の提案である。しかもそれは、緊急を要する課題として、困難な状況にありながら次代を担うべき人々に向けて発せられたものである。

1 「新憲法草案についての考察」『ロンドン論集』

靈性の根拠をヴェイユは、「この世の外側の実在」 - 絶対善の源 - 超越的なもの - と「人間の魂の中の善を求める部分」との絆に置く。その絆についての一連の考察は『ロンドン論集²⁾』においてなされたものである。

「人間の魂の中の善を求める部分」の考察は、「人格と聖なるもの」で表明されるものである。ここでいう「人格」とは、人間が社会的な威信等個々様々に纏っている外皮のようなもので、「聖なるもの」とはそのような全ての外皮を引き剥がした、素のままの人間を指す。

そして、そのような素のままの人間が全て等しく魂の奥に「善を希求する部分」をもつとヴェイユは主張する。

もう一つの重要な考えは、「人間に対する義務宣言のための試論」冒頭の「信仰告白」で述べられる、「この世の外側に絶対善の源となる実在」が存在するということである。そして、善を希求する魂が絶対善に向ける愛や注意によって、例外なくあらゆる人間がその外側の実在との絆を結び得、その絆によって、あらゆる人間が聖なるものとみなされ尊敬されると、ヴェイユは主張する。この絆（絆の可能性）が、あらゆる人間への尊敬の土台となるのである。

その「義務宣言試論」の主張は、そのようなあらゆる人間に敬意を具体的に表明することが人間の人間に対する義務であり、その義務を憲法の基本理念に据えるべきであるということである。それは、いわば現実の政治（この世の必然）と靈性（この世の外側の実在という超越的なもの）を結ぶことになる。そして義務を憲法の条文として具体的に規定すべきであり、その基本となるのが人間の欲求であると、ヴェイユは考える。そして彼女は「魂の欲求³⁾」を列挙する。その「義務宣言試論」が（具体的には「魂の欲求」一覧から）『根をもつこと』へと発展していく。

『根をもつこと』において、「根をもつこと」は魂の欲求の中でも最重要の欲求であり、全ての欲求の要であることが、表明される。そして、人間はこの世の「集団」に参加することによって根をもつと定義され、「集団」の重要性に焦点が当てられる。人間が根づける集団、その中に過去からの宝 - 文化・文明 - が生き生きと保たれている豊かな糧が得られる土壌としての集団が求められるのである。過去からの宝とは、人間の魂が連綿として受

²⁾ ロンドン論集には 9 編の論文が収録される。「人格と聖なるもの」「人間に対する義務宣言のための試論」等

³⁾ 魂の欲求とは奇妙な考え方（身体の欲求からの類推）であるが、ヴェイユは更に魂には「善を希求する部分」と「より地上的な部分」があるとする。このような魂の捉え方は、ギリシャ的思考特にプラトンの影響が指摘されている。

け継いできたこの世の外側の実在との絆である。

ところが、根づくべき集団は病んでいる。そこでヴェイユは、病んだ集団、「根こぎ」の集団を診断し、治療法 - 再根づきの方法を提示する。その集団は、労働者、農民、国民である。労働者の根こぎは、（物・部品の名目で入国を許可された）移民の根こぎに喩えられ

る。彼らは、根を運んで来たまま、その社会・集団に根を下ろせない状態である。その原因は、主に金銭崇拜と教育による労働の霊性の欠如にあるとヴェイユは指摘する。労働の場を真に根づける場に回復しなければならない。農民は、被植民地の人々の根こぎに喩えられる。その土壌に根を持ちながら、糧（過去からの文化を含む）が枯渇しかけている状態である。何をあいても、その糧を回復しなければならない。国民全体について言えば、まずその集団そのものが消失の危機にある。そして更に国民はそのことにも無関心な無気力病に陥っている。国民の病の原因は、多くの為政者たちが政治を行う上で正義を逸脱したこと、集団の中に過去との断絶があったこと、そして集団を構成する人間（国民）への配慮が忘れられ、その容器にすぎない⁵国家が国民の魂を貪ったこと等である。その集団を回復しなければならない。なぜならばその集団以外に根づく場は存在しないのだから。その際に、ヴェイユは回復すべき集団を「祖国」- 過去の霊的な宝と繋がる、功罪はあるが憐憫をもって救うべきもの - とし、それぞれが主体的に捉え直すことを提案する。

それは、「靈感を吹き込む」ことによって、無気力状態の人々を覚醒させることから始められる。靈感とは、真の根づきの場を回復するための基本理念である。ヴェイユは、その構築には、様々な障壁 - 偉大さの誤った概念、正義の感覚の墮落、金銭の偶像崇拜、宗教的靈感の欠落 - があるという。ヴェイユは、この世の力に依拠する従来の支配的な考え方の誤りを指摘する。彼女はいわば従来の価値観の問い直しを提案するのである。その価値観の問い直しが『根をもつこと』の意義でもある。その特徴は次の4点に纏められる。

1. 人間の尊厳の哲学を土台にしていること、
2. 労働の霊性を回復しようとする事、
3. 政治の原理となる理念を構築しようとしていること、
4. 霊性と政治を結び付けようとしたことである。つまり、『根をもつこと』の意義とは、魂のレベルで、この世の必然（現実）を捉えようとする事である。

根づける環境を回復すること、それは端的に言えばシテ⁴を回復することなのである。シテとは、人間の根づける理想の環境である。人間とは、この世の必然に従属しながらも魂の奥に善への希求を蔵する矛盾した存在である。シテはそのような人間の欲求を満たせる、

⁴ シテとは「ポリス」、ギリシャの都市国家を指すが、ヴェイユは象徴的に使っている。

この世の外側の実在との絆を過去から脈々と受け継ぐ様々な形態の文化が息づいていて、それを糧として人々が自然に根づける環境である。いわば、シテは、この世の現実とこの

世の外側の実在とに繋がるためのメタクシュ・媒介ということになる。しかしそれは、戯曲『救われたヴェニス』で描かれるように、この世にあって美しく懐かしいものであるが、非常に脆弱な環境でもある。その脆弱な環境を守ろうとすること、それがヴェイユの現実へのアンガージュマンである。

ところが、ヴェイユ自身は“*Il faut se déraciner.*”⁶とシテの追放者（根こぎ）であろうとする。一方で根づける集団・シテを回復することを問題にしながら、一方で自らは集団からの追放者になろうとする。彼女は、「根こぎ」というこの世の現実の不幸に我が身を曝すことが脱自（自我の叫びや欲望を抜け出す）であり、真理に触れることであると確信していたのである。

『根をもつこと』のみならずロンドンでの報告書はほとんどが当時の人々に無視された。確かにその提言された方策は、具体性のないものもあり、極めて具体的である故に却って実現不可能であると感じられるものもある。ラディカルさと保守性が同居している。しかし、その考察は、矛盾に満ちたこの現実世界（彼女が問い続けた1930年代の問題の多くが未だ存在する）を見る時、我々を照らす光であり続ける。なぜならそれは「善を望む魂」を中心とした現実社会の価値観の問い直し、「個」による主体的な、環境 - 家庭や職場、国家等社会・集団 - の問い直しを我々に要請するものであり、個々が主体的に様々な問題に注意し思考し尽くすことを我々に提案するものだからである。

⁵ 1940年に書き始められたが未完の戯曲。ヴェニスに対する1618年のスペイン人の陰謀を題材にしている。

⁶ *Cahiers II*, p.205

論文審査の結果の要旨

本論文はシモーヌ・ヴェイユの2つの著書『ロンドン論集』とそれを発展させた『根をもつこと』を比較し、そこに表されている思想を読み解くものである。それらの執筆の第一の目的が、当時フランスのかかっていた「ある病の診断と治療法を提示すること」であったことから、本論文ではまず1930年代のフランスの政治と社会問題について述べられている。

そして次に、両著作に共通する特徴として「義務の観念」について分析がなされている。ヴェイユは「権利概念」を相対的なものであると批判し「義務」を重視するが、その根底にあるのは彼女の宗教的人間観である。彼女によれば最も重要なのは、人間が等しく魂の奥に持つ「善を希求する部分」と「この世の外側にある絶対善の源となる実在」を結びつけることであり、そのことによって人々はあらゆる人間への尊敬の土台を得ることが出来るとされている。そしてこの尊敬を義務とした社会が理想とされる。

反対に2つの著作の中で「魂の欲求」の一覧表を比べた時、『根をもつこと』においては根付くための「集団」がより重視されていることが分かる。ヴェイユは現実の集団を考察した上で「善を望む魂」

によって回復すべき集団を各人が主体的に捉え直すことを提案する。

ヴェイユの論文には極めて具体的な状況分析と、その解決のために提示される精神的な方策とが不可分なものとして表明されている。そして「魂の欲求」に見られるように、一見対立したものが同時に必要であると述べられる。ヴェイユに関する研究書において、伝記的な部分に比べその思想に関する著書が少ないのもそうした難解さが原因となっている。本論文の優れた点は、突飛であったり矛盾していたりするように見える主張の一つ一つを丁寧に着実に整理し、首尾一貫した一つの主張として解明したことであり、又、『ロンドン論集』から『根をもつこと』の間で起こった関心の移動を明確化したことである。ヴェイユ研究において最も重要な著作の一つに新たな視点から体系的な解釈を与えたという意味で、本論文は高く評価することができる。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに値するものであると判断した。